

## 館林キリスト教会

### デボーションノート(2009年)

12月 1日 今日の通読箇所 詩篇119篇65~80

「貴重な経験」

「苦しみにあったのは私によいことです。私はあなたのおきて(聖書)を学ぶことができました」(71節)中国の聖人孔子は「朝に道を聞かば夕べに死すともよし」と言った。苦しい経験であっても神の言葉の真実を実感するために有益だったらそれもまよし。これはクリスチャンの実感だ。人間関係でも、幸福よりむしろ苦労の中でお互いの愛と真実を確かめあって「あの苦労はお互いに貴重だった」ということが多い。

12月 2日 今日の通読箇所 詩篇119篇81~96

「創造の言葉」

「あなたが地を定められたので地は堅く立っています。これらのものはあなたの仰せにより堅く立って今日に至っています」(90,91)始めに神はみことばによって天地をお造りになったとは聖書の教えだ。そのみことばによって今も天地は定まっている。我々が信じ依り頼み従っている聖書は、まさに同じ神の言葉なのだ。我々の救いも祝福も日々の助けも、みことばの真実と力、とりもなおさず神の真実と力にかかっている。真に頼もしい限りりだと思う。

12月 3日 今日の通読箇所 詩篇119篇97~112

「わが足のともしび」

ユダヤの昔の風俗で、夜道を行くとき仕掛けのある靴をはき、足のつまさきに小さな灯をつけて歩いたそう。現代の夜景で自転車に乗る人が足を光らせて行くのと似て、なにかユーモラスな人間の知意を感じる。暗い道は恐ろしいが人生の道はもっと暗い。正しく安全な道に人を導く「足のともしび」が必要だ。これは聖書のことをいっているが、ここで自然「私は世の光である」というキリストの言葉を思う。本当に聖書とキリストこそ真の光なのだ。

12月 4日 今日の通読箇所 詩篇119篇113~128

「みことばと希望」

特別集会を目前にした私はすぐ「私はみことばによって望みをいだく」(114節)また「今は主の働かれる時です」(126節)などの句が心に入ってくる。特別集会

の勝利のために我々はみことばの約束に頼っている。我々を励ましてこの事業に当たらせて下さった主がいよいよ集会において立上り、勝利と栄光を現わして下さると、期待するのだ。

12月 5日 今日の通読箇所 詩篇 119 篇 129 ~ 144

「真理を求める」

ちょうどいま勉強したいテーマに関する善い本を見つけて買うと、はじめから1ページずつ読むのがもどかしくて、一度にムシャムシャ食べてしまいたいことがある。ここに神の言葉の真理に対し、咽喉の渴いた獣が必死に水を求めるように「口を広く開けてあえぎ求める」とあるのは何という真実な態度だろう。神は求めに答えてみことばの真理と祝福をもって彼の心を満たして下さる。そして「みことばが開けると光を放ち、無学な者は知恵を得る」のだ。

12月 6日 今日の通読箇所 詩篇 119 篇 145 ~ 160

「祈りとみことば」

(145,146)には、祈りとみことばの関係が美しく歌われている。詩人は神の約束の真実に頼って、祈りの答えに深く期待している。だが同じように神も祈る者に、神の、さだめ、あかし、すなわちみことばに対する真実な信仰と従順を望んでおられることを彼は知っている。神が祈りに答えたもうという信仰と、みことばに対する神の期待どおりの真実な態度の告白。この二つは実は切り離せない祈りのセットなのだ。

12月 7日 今日の通読箇所 詩篇 119 篇 161 ~ 176

「七回の祈り」

(164 節)に、一日に七回神を賛美するとあるが、イスラエル人にとってこれは祈りの時でもあった。外国人にまでその習慣を認められたダニエルや、使徒行伝 3 章でペテロ、ヨハネが午後 3 時、つまり一日五番目の祈りのために神殿に入った模範もある。我々も起床、朝食、午前、昼食、午後、夕食、就眠の各時に一日最低七回の祈りはしたい。

12月 8日 今日の通読箇所 詩篇 120 篇 1 ~ 7

「寄留者」

「あなた方はこの世では悩みがある」とキリストも仰せられた。「わざわざいなるかな。わたしはメセクに宿り、ケダルの天幕の中に住んでいる」というのはその意味だ。自分は真実に生きたいのに人々はいつわりを語る。自分は平和に生活したいのに人々の争いにも巻き込まれる。これはいつでも世に住むクリスチ

ヤンの嘆きだ。だから「主よ早く再臨して世界を支配し、新しい世にして下さい」という祈りは、常にクリスチャンの口から絶えないのだ。

12月9日 今日の通読箇所 詩篇121篇1~8

「旅人の詩」

「昼は太陽があなたを撃つことなく夜は月があなたを撃つことはない」とあるが、昼は順境を夜は逆境を示すと言われる。日射病は、心身虚弱で引っ込み思案の人などがかかる病気ではない。元気に委せて暑い日中に歩き回るような人が急に倒れるのだ。反対に、夜いつまでも淋しい月光にさらされていると気が変になるので、昔は狂人を月射病(ルナーク)などといった。これは暗い淋しい逆境の病気だ。神は我々をどちらの病気からも守って下さるのだ。

12月10日 今日の通読箇所 詩篇122篇1~9

「教会の平安と栄光」

これは「都詣で(礼拝)の詩」と言われる。このように家族友人が「さあ主の家(教会)に行こう」と誘いあって集会に来るのは大きな喜びであり、祝福である。教会がもめるのでなく一致と平安に守られ、教会が寂れるのでなく祝福と繁栄に満たされるようにみんなで祈ろう。また「エルサレムを愛するもの」すなわち教会員のために、彼らの心身、生活、家族に「平安と栄え」が与えられるよう心を合わせて祈ろう。

12月11日 今日の通読箇所 詩篇123篇1~4

「注目」

何かに困った寂しい場面で、奴隷がその主人に向かい、女中さんがその主婦に向かって注目するのは、物にしる慰めの言葉にしる、何か与えられるの期待するからだろう。この詩はそれを歌っている。しかし別の時の彼らの「注目」は、喜んで主人に仕えようと待機して命令を待つ。彼らの忠実の現われであろう。我々も日夜、喜びにつけ悲しみにつけ、時には祝福や賜物を求め、時には奉仕のために命令を待って、祈り待ち望み主に注目しなければならない。

12月12日 今日の通読箇所 詩篇124篇1~8

「臨在は救いである」

クリスチャンも世にあって迫害や困難に出会う。怒りを燃え立たせる迫害者。人を溺れさせる洪水のように押し迫る困難、鳥のわなのように捕らえようとする誘惑。ああもし主がわれらと共にいらっしゃらなかったら、弱いわれらはひとたまりもなかったであろう。しかし今なおこのように守られているのは「主

の臨在のみが救い」だからである。

12月13日 今日の通読箇所 ヨエル書1章1～12

「イナゴの災害」

「ヨエル」は「主は神である」という意味で、イスラエルにはごく普通の名前からして、旧約聖書にも同名の人物が十数名もいる。またこの預言者がどこでいつ預言したのかよく分からない。なにしろこの書には王様の名前も出てこないのだ。しかし多分イスラエルがバビロンに滅ぼされる直前の預言者と思われる。イスラエルは当時、各種のイナゴの災害に悩んでいた。この地方のイナゴは雲霞の如く押し寄せてあらゆるものを食べ尽くしてしまう。現在でもレールに群がるイナゴを轢き潰すため、その油で電車が脱線するくらいだ。しかしこのイナゴも、やがて神の裁きの実行のため、襲って来るバビロン軍の前兆なのだ。悔い改めを促す神の警告なのだ。

12月14日 今日の通読箇所 ヨエル書1章13～20

「祭司よ泣け」

イナゴの災害、近づくバビロン軍の攻撃と、国は非常事態だ。このときヨエルは祭司たちに向かって言う。「泣け」「泣きつつ夜を過ごせ」と。祭司は神と民の間に立って、民の悔い改めを神に取り次ぎ、民に代わって神の祝福を祈り求める、すなわちとりなしの祈りの努めを期待されているのだ。さればこそ、今は彼らが「泣きながら祈る」時なのだ。わたしは「涙の祈り」の少ない牧師であることを恥じる。しかし祭司だけでなく、すべての人が「悲しむものと共に泣き悲しみつつ」試練、苦難に遭う人のために祈らなければならないのだ。それゆえヨエルは「聖会を招集し、長老たちを集め、断食を布告し、主に向かって叫ぶ」ように勧めている。われわれも、心を込めてお互いのために祈り合う集会を大切にしよう。

12月15日 今日の通読箇所 ヨエル書2章1～11

「暗い日」

預言書も大体「詩」の形式で書かれている。また比喩的形容の限りを尽くした名文が多い。ここにはイナゴの被害が書かれている。(もちろんその背後にはバビロン軍侵入の暗示が重ねてある)。イナゴの来襲は「薄暗く、やがて真っ暗になる」のが前兆だ。彼らの来襲は「山野、村落を選ばず焼き尽くす山火事」のようだ。彼らの侵入はまるで「規律正しく訓練された、整然たる軍隊」のようだ。彼らは山野、耕地だけでなく「町に入り、城壁の上を走り、家々によじ登り窓から屋内に侵入する」警察も軍隊も手がつかない。実はこれは神の裁きなのだ。恐るべき

ことに「その軍勢の前で号令をかけるのは神様なのだ」。言葉のはしはしに暗示される、イナゴ以上の浸入者、バビロン軍こそ、さらに恐ろしい災害をもたらそうとしている。これがヨエルの警告なのだ。

12月16日 今日に通読箇所 ヨエル書2章12～22

「聖会の招集」

昔の聖会では、牧師たちの準備の祈り会や最初の集会でよくこの聖書が読まれた。また、28節以下の「聖霊のそそぎ」のお言葉も読まれた。使徒行伝2章のペンテコステの祈り会でも同じお言葉が読まれたようだ。ある意味でヨエル書は「聖会の書」とも言えるのだ。祭司と民とを問わず、老人と青年とを問わず、また新郎新婦も招集を受けた。そしてそこでは自分の罪を悲しみ、国と民の現状を悲しみ、失われた神の祝福を求めて、心をこめて泣きつつ祈ることが期待された。痛みも苦痛も感じないのは病人の末期症状の一つだなどとよく言われる。われわれも自己満足に耽り、いつか神の前に泣く心を失ってはいないだろうか。

12月17日 今日に通読箇所 ヨエル書2章23～32

「聖霊の注ぎ」

ここからは、人々の悔い改めを受け入れ祈りに答え給う、神の祝福の回復が語られている。イナゴの害、敵軍侵入の災禍も回復する。(28・29節)には聖霊の注ぎの約束がある。これはクリスチャンの魂と生活と証の回復なのだ。その結果「老人たちは夢を見、若者たちは幻を見る」と言われる。夢とは現状維持、尻込みの反対で、理想を描き、力一杯前進することである。そして「すべて主の名を呼ぶ者は救われる」という有名な約束が続く。館林キリスト教会の老人青年にも、この約束が与えられている。足踏み状態でなく、夢を見幻を見ながら進もう。主はさらに多くの「主の名を呼び求める者」を起こして下さるのだ。

12月18日 今日に通読箇所 ヨエル書3章1～16

「イスラエルの回復」

今まで読んできた預言書には、「イスラエルの罪に対する神の裁き」のメッセージが多かった。読みながら疲れを感じるほどだった。しかしヨエル書にイスラエルの許しと回復の預言が多いのは、慰めである。彼らを攻撃し侵略し、苦しめ辱めた諸外国が、いま反対に神によって裁かれるのだ。昔に比べれば、現在はイスラエルが回復している時代だ。でもなお、彼らの罪と苦悩は継続している。しかし最後の日、キリスト再臨の日に、世界の諸悪が裁かれる時、イスラエル人の救いと回復が成就するのだ。この日の救いはイスラエルだけではない。

いま世にあっては孤立し、肩身の狭い思いで生活するすべてのクリスチャン、教会にとっても、救いと祝福の日であるのだ。これがわれわれの最終の、また最大の希望なのだ。

12月19日 今日に通読箇所 ルカによる福音書14章1～14

「パリサイ派の指導者に対する戒め」

この箇所は三つに分かれる。1節から6節までは、律法の専門家やパリサイ人への戒めである。安息日の争いが繰り返し起こった。しかしイエス様にとって人の命が律法に優先する事を教えている。7節から11節まではパリサイ人の家に招かれた人々に対する戒めである。招かれた人々が上座を好んで、末座に着きたがらない。彼らが上座にすわりたがるのは、自分がそれにふさわしいと人に認められたいと思っているからである。そういう人は退けられる。神様は謙遜な人々を愛されるからである。そして12節から14節までは、パリサイ派の指導者に対する戒めである。パリサイ人たちは、神様から受ける報いよりも人から受ける報いを期待していた。しかし真の報いは、隠れた事を見ておられる神様から来ることを教えている。

12月20日 今日に通読箇所 ルカによる福音書14章15～24

「盛大な晩餐会のたとえ」

ある人が盛大な晩餐会を催し、大勢の人々を招いた。時間がきたので、主人はしもべを遣わしたが、招かれた人々はそれぞれに「土地を買ったので」、「牛を買ったので」、「結婚したので」と、理由をつけて断ってきた。彼らに共通しているのは、招いてくれた人への関心よりも、自分の生活への関心の方が大きいことである。このたとえに登場する宴会の開催者は神様であり、宴会は神の国の食卓である。そして招くために送り出されたしもべとは、イエス様ご自身である。「神の国で食事をする人はさいわい」(15節)であるのに、無関心な人々が多かった。結局、神の国の宴会に招かれたのは、神の恵みを素直に受け入れる人々だった。神の国に入るためには、自分の力や才能ではなく、神の恵みである事を彼らがよく承知していたからである。

12月21日 今日に通読箇所 ルカによる福音書14章25～35

「何を第一に？」

文字通りなら「自分の命までも捨てて」とは自分の命を失う、すなわち死んでしまうことですから、その先の話は進展しません。ではどういう意味なのでしょう。第一とすべきこと、第二とすべきことという見方をするなら、第一に、神様を敬い感謝して生きるべきだということです。自分も家族も神様の愛と許

しなしには地上に存在しないのですから。第二に、自分や家族を愛すること、家庭の一員として愛と責任をもって生活すべきだということです。財産についても、管理を任せてくださった神様のみ心を第一に、ということです。「...天に、尽きることのない宝をたくわえなさい。あなたがたの宝のある所には、心もあるからである」ルカ福音書 12 章 33,34 節。神の国の建設、霊の戦いにおいて、神様の恵みを数えるなら豊かな備えがあることがわかるでしょう。

12月22日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 15 章 1 ~ 10

「捜し続ける羊飼ひ」

神様の愛のみ手、保護のみ手から迷い出たのは取税人たちであり、罪人たちでしたが、的外れに歩んでいるパリサイ人や律法学者たちもまた神様の愛から迷い出た人々でした。羊が見出され、銀貨が捜し出されたのは、羊飼ひや、女の人のどこまでも捜し出そうとする愛と熱心によりました。大きな喜びと共に、羊飼ひに見出された羊には安全、保護が与えられ、女の人の手に戻った銀貨には真の価値が戻りました。神様の愛と保護から迷い出た人間を心にかけてどこまでも捜し続けてくださっているのは神様です。神様であるひとり子イエス様が人となってこの地上においでくださって救いの道を備えてくださったのは神様の愛の熱心によります。イエス様によって神様に帰るなら愛と保護のうちに真に生かされるのです。

12月23日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 15 章 11 ~ 32

「放蕩息子のたとえ」

ある日、弟息子が、自分の取り分の財産をお父さんにわけてもらい、その土地を売却して金に替え、家を出てお金を湯水のように全部使い果たしてしまいました。その後の飢饉で食べるものにも窮し始め、彼は惨めにも、豚飼ひをして飢えをしのいでいる有様でした。その時、彼は父の愛に目覚め、家に戻って行ったのです。父は神様を現わし、弟息子は人間を現わしています。父はこのぼろぼろになって帰ってきた弟息子を喜んで迎えた、というたとえ話です。このたとえ話は、すべての人に「人間の罪とは何であるか」、「罪の悔改めはどうすればよいか」、そして「罪のあるものをかえりみてくださる神の愛がどのように深いか」をしみじみと語りかけてくれます。いつの時代においても、この「放蕩息子のたとえ話」を読んで絶望の暗黒の中で光を見出し、その靈性に大いなる飛躍を経験するに至った人は大勢いるのです。

12月24日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 16 章 1 ~ 13

「不正な家令のたとえ」

このたとえ話は不思議です。主人が「この不正な家令の利口なやり方をほめた」とあるからです。ではイエス様は、不正を勧めているのでしょうか。そうではありません。イエス様は、この家令が首になる時までの短い時を有効に使い、辞めさせられる日の為に備えたということをはめているのです。私たちは、この家令が辞めさせられるように、いつ死ぬかわかりません。ここでイエス様が「不正の富」と言っているのは、地上のこと、私たちの毎日の生活の事です。「真の富」と言っているのは、神様のこと、永遠の命の事です。たとえこの世の生活の中に、「不正の富」といわれたり、「小事」といわれるようなものがあったとしても、その中でこの不正な家令がしたように、精一杯忠実に生きるのです。それ以外に、あの「真の富」を任せていただける道はない事をこのたとえ話は教えているのです。

12月25日 今日に通読箇所 ルカによる福音書16章14～31

「金持ちとラザロ」

ある金持ちがいました。彼はいつも高価で贅沢な紫の着物と細糸の亜麻布を着て毎日、宴会を催して楽しく暮らしていました。彼の家の門にラザロというこじきが、しかも、ただれたできもので覆われて、だれにも相手にされずにいました。ラザロが亡くなったとき、み使いたちによってアブラハムのふところに連れてゆかれました。金持ちも亡くなり葬られ、彼は黄泉にいて苦しんでいました。神様がご覧になり、お取り扱いの基準になさるのは、人間同士では、目に見えない心で、「しかし、神はあなたがたの心をご存じである」15節、ということです。地上の人間が救われるためには、「モーセと預言者」、聖書があれば充分で、たとえ、死人がよみがえったとしても神を信じないだろう、とあります。厳粛なみ言葉です。悔い改めてキリストを信じて歩むことがどんなに大切でしょう。

12月26日 今日に通読箇所 ルカによる福音書17章1～10

「弟子たちへの教え」

弟子たちに対する教えです。この世にいる限り「罪の誘惑」は避けられないが、「小さい者のひとり」に対して、罪の誘惑を来たらせる者でないようにということです。罪の誘惑とは、人を誤らせ滅びに導くもの、イエス様に従って行けなくさせる、イエス様から引き離すものことです。罪の誘惑を来たらせる、これは重大な罪で、ひきうすを首にかけられて海に投げ入れられた方がましだと言われるほどです。「信仰を増してください」と言う弟子たちに、たとえ小さな信仰でも、生きた信仰には力があること、しかし、すべては神様の恵みですから、主人に仕える僕のように、「わたしたちはふつつかな僕です。なすべき事

をしたに過ぎません」と言うべきだと教えられました。

12月27日 今日に通読箇所 ルカによる福音書17章11～19

「サマリア人の感謝」

イエス様は、ご自分がこの地上に来た目的を「失われた人を尋ね出して救うためである」とおっしゃいました。今やその使命を十字架によって完成させるためにエルサレムに向かっているところです。途中ある村で、隔離されて生活していた十人の重い皮膚病を患っている人に出会いました。重い皮膚病は、当時まったく治る見込みのない、死を宣告されるのと同じ病気でした。しかし、イエス様は助けを求める彼らに対し、重い皮膚病を完全に治してあげました。この十人のうち九人はお礼も言わず自分の生活に戻って行きましたが、サマリア人だけは神をほめたたえながら引き返し、キリストの足もとにひれ伏して感謝しました。その時、このサマリア人はイエス様から「あなたの信仰があなたを救った」とのお言葉をいただき、罪の赦し、心の平和、永遠の生命を与えられたのです。

12月28日 今日に通読箇所 ルカによる福音書17章20～37

「神様の支配の始まり」

神様の国はどのようにして始まるのだろうか。イエス様は、本当の神様の支配はパリサイ人が考えているのとは異なると教え、「神の国は、見られるかたちで来るものではない」(20節)と語られた。「神の国」は、派手な、見世物のような形では到来しない。大切なのは私たちの心の中の有様である。神様の国は、イエス様を通し、実にあなたがたのただ中に到来したからである。26節からは、旧約時代のノアとロトについての事例が記されている。神様の裁きは人々が思いもよらない時に起こったのである。この時に正しい人は神様によって守られた。日頃の備えが必要で、油断していると、慌てることになってしまう教訓だ。だから主が再びおいでなる再臨の時に備え、罪人の世界に下る審判に巻き込まれないように、一時の快樂へと引き込まれることなく、むしろ自分を清めて生きることを強調されたのである。

12月29日 今日に通読箇所 ルカによる福音書18章1～8

「失望しないで祈りなさい」

イエス様の譬はわかりやすくユーモラスです。「失望」とは気を落とし、落胆し、あきらめることです。失望の結果、祈っても仕方がない、祈っても何も変わらない、祈りは神様のもとに届かない、祈りをやめる、ということになります。わたしたちは信仰によってイエス様を信じて救われたにもかかわらず、日常の

事柄について神様に助けを求めることを忘れていないでしょうか。神様はピリピ人への手紙4章6節、7節のように、何事も神様に申し上げなさいと、勧めてくださっています。また「神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。」(テモテへの第一の手紙2章4節)のですから、人々の救いのために祈り求め、労することは神様のみこころです。それなのに、はじめからあきらめて祈り求めることさえしない、という自分の姿を思わされません。

12月30日 今日に通読箇所 ルカによる福音書18章9～14

「罪人のわたしをおゆるしてください」

パリサイ人は神様の教えに従おうと努力し、正しく生活していると自負していました。彼の努力と正しい生活には頭が下がります。どのくらいの人々が、彼のように実行しているのでしょうか。残念だったことは、彼が、自分の努力や正しい行いによって神様に受け入れられると勘違いしていたことです。機織り作業によって、目を見張るような生地が織られてゆきます。しかし、巧みに美しく織りあがっても最初の段階でしみや傷がついたら、オシャカになってしまいます。罪人である人間が、自分の正しさや行いをいくら積み上げてみても、それで罪が帳消しになることはありません。この取税人のように、罪を悲しみ心砕かれて、まことにわたしは罪人です、と告白し、ただただ主を仰ぎ見るとき、いつくしみ深い主は恵みによって受け入れてくださるのです。

12月31日 今日に通読箇所 ルカによる福音書18章15～34

「幼子、金持ちの青年、弟子たち」

ここからいよいよエルサレム訪問と十字架の死、復活と言うテーマに移っていく。初めにルカは、当時ユダヤ人の母親たちが有名なラビに子供たちを祝福してもらいたいと思ってきた。ここで弟子たちは、イエス様が迷惑されると思って母親たちをたしなめた。その時、イエス様は弟子たちの間違いを正し、幼子たちをみもとに呼び寄せられた。次にルカはあるユダヤ教の役員の話を書いている。彼はまだ青年だが金持ちである。しかも小さい時から十戒を守り、良い躰と教育を受けた名門の出である。その彼が永遠の生命を得るための善行を尋ねると、イエス様は全財産を処分し、貧しい人にあげなさいと告げられた。彼はこれに答えられず、去って行った。彼は神に心をおいたのではなく、財産に信頼を置いていたからだ。31節からは十字架と復活の予告が記されている。弟子たちは度重なる予告にもかかわらず、イエス様の語られた言葉の意味を理解できなかった。